



写真-1 戸田橋から岸田川下流&山陰本線を撮影（平成27年5月）

■ 室戸台風による大災害を契機として、「川替え」計画が一転動き出す

昭和9（1934）年9月の室戸台風により壊滅的被害を受けたことが契機となって、田中与七郎が情熱を燃やした岸田川※1の川替え計画がようやく動き出しました。

災害からの復興を迅速に進めるため、同年11月22日に浜坂臨時土木出張所が発足、昭和10（1935）年5月8日には岸田川水害予防組合※2が設立され、岸田川改修に伴う用地の買収、登記事務、水害予防事務などを取り扱うこととなりました。

そして、県はこの災害を契機に制度化された災害復旧助成事業により、昭和12（1937）年岸田川改修に着手します。昭和13（1938）年11月29日には、岸田川水害予防組合主催による岸田川改修工事起工・修祓（しゅぱつ）式が福富地区内の工事現場において執り行われました。

工事は、太平洋戦争の影響もあって男手が少なく、工事の進捗ははかばかしくなかったようです。やむなく地元の女性たちが改修工事に従事したそうですが、よい日当稼ぎができたとか。改修の根幹をなす川替え区間が概成したのは昭和16（1941）～17（1942）年の頃だそうで、この頃に山陰本線の新岸田川橋梁も竣工しています。

なお、竹田までの全区間が完成したのは終戦後ですが、敗戦のため祝賀行事はなかったそうです。

※1 岸田川：昭和5（1930）年4月1日から旧河川法に基づく準用河川に認定される。区間は、美方郡八田村岸田地内鑑谷川合流点以下海に至るまで。

※2 水害予防組合：堤防・水門の保護など水害の防御に関する事業を目的として、水害予防組合法（明治41年4月制定）に基づいて設立される公共組合。水害の予想される一定区域内の土地・家屋の所有者を組合員とする。

■ 昭和の大改修の貴重な工事写真

以下に掲載するモノクロ写真は、浜坂在住の郷土史家・岡部良一さんが所蔵する写真を複写させていただいたものです。

(1) 右の写真-2 は、今の「浜坂温泉保養荘」付近から撮影したもので、撮影時期は、岸田川下流部の工事が概成した昭和 16 (1941) 年秋頃と思われます。



写真-2 浜坂温泉保養荘付近から岸田川を撮影 (昭和 16 年秋頃)



(2) 写真-3 は、久斗川と岸田川の合流部付近を撮影したものです。久斗川の流れが当たる岸田川左岸部には、堤防に対して直角方向に水制工（杭出し）が設けられています。

(3) 写真-4 は、川替え区間を切り割り付近の山から撮影したものと思われます。写真下方の水面が旧岸田川です。北へ延びる新河道では、堤防がある程度出来上がっていますが、農地がそのままの状態が残っています。また、建設中の戸田（へだ）橋や山陰本線の新岸田川橋梁、福富橋が見えます。

(4) 戸田橋（へだばし）：(写真-5) 橋長 100m を超える木橋ですが、昭和 33 (1958) 年にトラス橋に架け替えられました。このトラスは、洲本川に架けられていた塩屋橋架け替えに伴い不用となった 6 連トラスのうちの 5 連が、ここ岸田川で再利用されたものです。『ひょうご水百景 No.48』参照)

(5) 七釜橋（しちかまばし）：(写真-6) 中央の 3 径間が木造トラス構造になっています。明治後期から昭和の戦前にかけて支間が 15m 以上の木橋にはトラス構造が用いられたそうですが、特に戦時体制下において、鉄が軍用に与えられたことに加えて、当時、木材でも大部材は得難くなっていたことから、小部材で構成することが可能な木造トラス橋が採

用されたようです。ただ耐久性と耐荷力が低く、昭和 30（1955）年頃からの道路整備の進展による橋の永久橋化で木造トラス橋は姿を消してしまったそうです。

なお、岸田川流域には、このほか一般県道・熊谷味取線の神田橋（新温泉町伊角）と一般県道・久斗山今岡線の権現橋（新温泉町熊谷）が、昭和 14（1939）年に木造トラス構造で架けられたようで、写真が残っていました。



写真-3 久斗川と岸田川の合流部
（合流点下流の岸田川左岸部には杭出し水制工が設けられている）



写真-4 新旧岸田川の分岐部から新岸田川の下流方向を望む



写真-5 戸田橋（木橋）

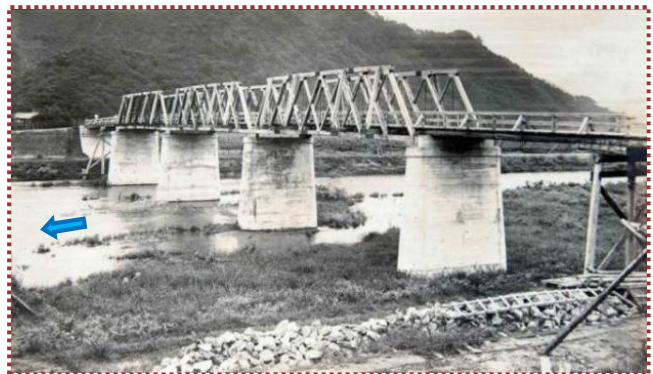


写真-6 岸田川に架かる七釜橋（中央3径間は木造トラス）

■ 旧岸田川に架かる立会橋が被災

立会橋は、旧岸田川に架かっていた橋で、直下流には山陰本線の岸田川橋梁が架かっていました。室戸台風による洪水で左岸側から2基目の橋脚が沈下し、桁が写真-7 および8 のようになってしまいました。写真の日付から復旧工事に着手したのは、被災後6年が経過した昭和 15（1940）年になってからです。

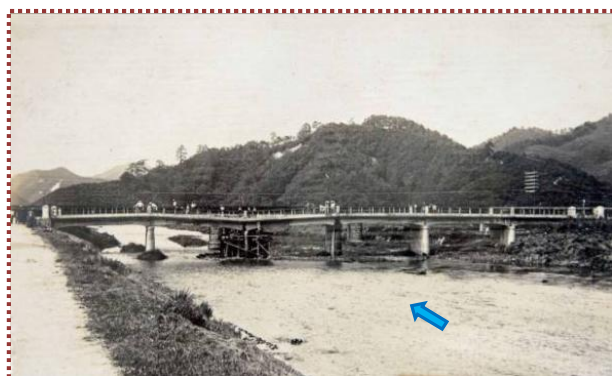


写真-7 立会橋の橋脚1基が沈下している。（昭和15年8月20日撮影）

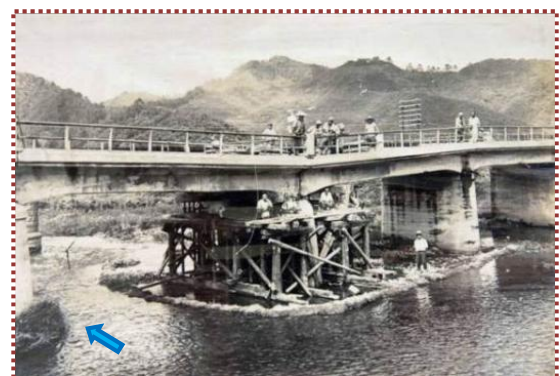


写真-8 昭和15年8月21日撮影

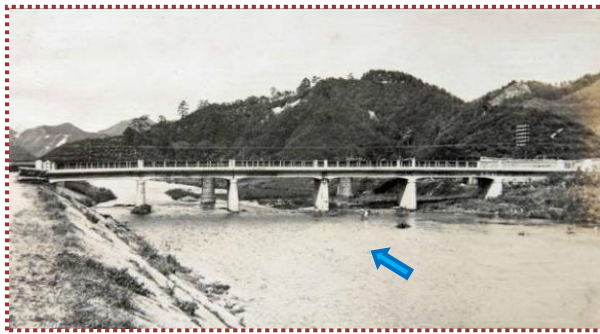


写真-9 昭和 15 年 10 月撮影（立会橋の下流は山陰本線・岸田川橋梁）



写真-10 昭和 15 年 8 月 22 日撮影



写真-11 昭和 16 年 2 月 25 日撮影

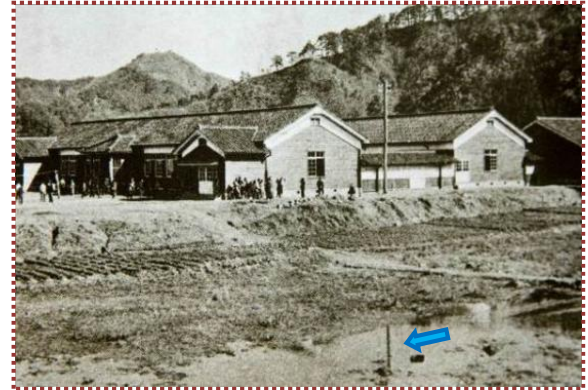


写真-12 大庭中学校 一段低い所が旧河道を造成してつくったグラウンド

立会橋の復旧は、まず橋脚の周囲に足場を組み（写真-8）、傾いた桁の下に角材を渡して、足場と角材の間にジャッキをかませて、桁をジャッキアップした後、橋座を嵩上げし、その後、写真-11 のように橋脚基礎の補強を行ったものと思われます。

また、岡部さんの話によると、岸田川旧河道は、その一部が大庭中学校とそのグラウンドになり（写真-12）、立会橋の桁下空間はサークルの部室に利用されていたとか。

昭和 51（1976）年、大庭中学校は統合により移転、その跡地は昭和 56（1981）年 9 月頃に今の状態に埋め立てられて公立浜坂病院が建設されました。

■ 岸田川旧河道の名残を探して

岸田川の旧河道跡の名残りを探して現地を歩いてみましたが、国道 178 号より上流部については何も確認できませんでした。下流部については、山陰本線下のボックスカルバートから久斗川に架かる岡住橋上流の樋門まで水路が続いていて、これが旧岸田川の名残りと考えられます。



写真-13 公立浜坂病院（大庭中学校跡）



写真-14 JR 山陰本線下のボックスカルバート



写真-15 道路が旧岸田川の左岸堤防と思われる

写真-16 は、昭和 22 (1947) 年に米軍が撮影した空中写真です。昭和の大改修が完了した直後の写真なので、岸田川旧河道も埋め立てられずに残っています。

■ モノローグ

昭和 20(1945)年の枕崎台風、昭和 34 (1959) 年の伊勢湾台風とともに昭和の三大台風と呼ばれた室戸台風は、室戸岬上陸時に 911.6hPa という驚異的な低気圧を記録し、本土上陸時の最低気圧としていまだにその記録は破られていません。

地球温暖化の影響なのか、想定を超える集中豪雨が多発している現在においても、かなりびびる数値です。

なお、災害復旧助成事業は、この災害を契機に制度化されたものですが、兵庫県では、竹野川、矢田川、岸田川がこの時に事業化されました。



写真-16 昭和 22 年の岸田川下流部の写真

【参考資料】

- 1 『写真でつづる浜坂町』 浜坂町 昭和 59 年
- 2 『平成 16 年度企画展～川替えと村絵図展～清富・田中家文書の世界』 浜坂町先人記念館
- 3 『兵庫の河川事業 50 年のあゆみ』 兵庫県土木部河川課 平成 3 年 3 月
- 4 『濱坂町史』 浜坂町史編集委員会編 昭和 42 年 4 月
- 5 『岸田川水系河川整備基本方針』 兵庫県 平成 21 年 3 月
- 6 『土木史研究講演集 Vol.24 日本の木造トラス橋』 安達實、山下武秋、藤田美輝、住勲、北浦勝 平成 16 年
- 7 『アルストロメリア』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

アルストロメリア

ユリズイセン科アルストロメリア属の単子葉植物。和名はユリズイセン (百合水仙)。南米原産で約 50 種が知られ、いずれもアンデス山脈の寒冷地に自生する。1753 年、南米を旅行中だったカール・フォン・リンネ自らが種を採集し、親友のスウェーデンの男爵クラス・アルストレーマーの名に因んだ名を付けた。花は年に 1 回、春から夏の間 (5～6 月) に咲く一季咲きだが、生育する場所や環境によっては長期間咲き続けるものもある。花の寿命は長く、品種によっては開花して 1 ヶ月以上もつ種もある。最盛期は 5 月～6 月だが、四季咲き性の品種は春～晩秋まで花を咲かせる。大正 15 年 (1926) に日本に渡来した。



写真-17 七釜橋近くの畑に咲いていたアルストロメリア

※発行：平成 28 (2016) 年 11 月 『ひょうご水百景』 No.66
改訂：令和 8 (2026) 年 5 月 『ひょうご水百景』 No.66